「ドタバタ子育て奮闘記」

うえっぴー　（30 代）

窓を開けると、阿蘇五岳が今日もどっしりと煙を上げている。その雄大な姿に「よし」と一呼吸入れた瞬間、「お父さん、カエル捕まえた！」と泥だらけの長男が飛び込んできた。後ろからは次男が泣きべそをかき、双子の長女と次女がキャッキャと笑いながらそれを追いかけてくる。我が家の朝は、いつも阿蘇の噴火に負けないくらい賑やかだ。

九州のへそ、熊本県阿蘇の田舎町で、私は 4 人の子供たちの子育てに追われている。上は小学生から下は未就学児まで。正直に言おう。毎日が戦場だ。洗濯機は一日に最低 3 回は回るし、米の消費スピードは我が家の経済を脅かすレベルである。静寂なんて言葉は、この家には存在しない。

けれど、この大自然の真ん中で暮らし始めてから、私は「子育てに追われる」ことのなかに、何にも代えがたい贅沢が隠れていることに気づかされた。

都会にいた頃は、子供の立てる物音や、予定通りに進まないスケジュールにいつもピリピリしていた。しかし、阿蘇の広大な景色は、不思議と父親である私の器を広げてくれる。子供が服を泥だらけにして帰ってきても、「阿蘇の豊かな土に触れた証拠だ」と笑えるようになった。

ここでは、自然すべてが教科書であり、最高の遊び場だ。春には近所のあぜ道でツクシを摘み、夏には一の宮の湧水群で冷たい水に歓声を上げる。秋には黄金色に輝くススキの海を駆け抜け、冬には厳しい寒さのなかで薪ストーブの火をみんなで見つめる。

4 人いれば、当然ぶつかり合いも多い。おもちゃの取り合い、おやつの配分、些細なことで毎日大騒ぎだ。それでも、上の子が下の子の面倒をごく自然に見る姿や、泣いている妹の涙をそっと拭いてあげる兄の姿を見る瞬間、胸の奥がじんわりと温かくなる。4 人の個性が、阿蘇の四季のように移り変わりながら、お互いを刺激し合って成長していく。そのグラデーションを特等席で見届けることができるのは、父親としての至福だ。

もちろん、頼れる実家が近くにあるわけでもなく、妻と二人で文字通り奔走する日々だ。自分の時間なんてものは、子供たちが眠りについた後のわずかな数十分しかない。それでも、夜中に 4 人の川の字になって眠る寝顔を見つめていると、昼間の疲れはどこかへ吹き飛んでしまう。

「お父さん、大きくなったら阿蘇の火山を直す人になるね」と、長男が真面目な顔で言ったことがある。スケールが大きいのか、ただの勘違いなのかはわからない。けれど、この雄大な土地で、4 人の子供たちは間違いなく、五感をフルに使って、たくましく根を張っている。

今日もこれから、夕飯の支度と壮絶なお風呂タイムが始まる。思い通りにいかないことだらけ。だからこそ、面白い。阿蘇の風に吹かれながら、私は今日もこの愛おしい喧騒を、全身で楽しんでいる。